

# 始末屋

月宮悠

## 来客

---

始末屋。それは例えテストの赤点だろうが国家の機密情報だろうが、なんでも始末する裏の仕事。かつて非公式に政府が設立した直属の暗躍部隊だったが、今の世の中には必要がないとして、実質廃業状態にある。

その最後の当主とされるのが葉月葉一である。

前当主であった父親、兼は常々こう言っていた。

始末屋は依頼された対象を始末すればいいというものではありません。そんなことなら、誰にでもできますからね。

始末屋に求められること。それは――。

「・・・ん」

何か、重要なシーンだった気がする。夢――だったのか。

朝日と鳥たちの声に目を覚ました。なんて言ったら優雅なお嬢様のような起床だが、ただ朝がきて目が覚めただけだ。

懐かしい夢だったなあ。

昔、父さんと暮らしていた頃の夢。

あの頃は父さんが始末屋葉月家最後の当主とされていた。しかし、最後の当主となったのは葉月葉一だった。

一見するとどこにでもいそうな、オッドアイが特徴の十七歳の女の子だが、その実は裏の第一線で活躍する始末屋だ。依頼されれば、例え人であろうと始末する。

今のところ人の始末依頼は来てないが、舞い込む依頼は全て完璧にこなしてきた。

「葉一さま」

ドアをノックする音と、若い女の声がした。

「ああ、開いてるよ」

「失礼します」

入ってきたのは、透き通るような金色のロングヘアーが特徴の二十四歳の女性だった。身長は158cmで青い瞳がよけい日本人離れした雰囲気を持たせているが、一応日本人。普段着はいつも愛用の和服姿で、体重は極秘事項らしい。

「おはよう、金。今日は珍しく早いね」

「ひどいですねえ、あたしはいつもこの時間ですよ」

ふくれたように抗議するが、実際この時間には滅多に起きない。

「それで？ 今日は何にを企んでいるのかな？」

「えへへー。バレました？」

「バレバレですよ」

どうせなにか変なものが欲しいとか言うんだらうと思いながら、寝巻きを着替える。

「あら、葉一さま、そんな人前で簡単に脱ぐのはいけません」

「なに言ってるの、いつものことじゃない。というかあなたは女性でしょう？ 男性を前に着替えるなら言われてもいいけど」

「確かにそうですが、着替えるさいは『着替えるから少し外で待ってて』ぐらいは言いましょーよー」

「自宅で身内の女性にわざわざそんなこと言うの？ それで、なにか欲しいものがあるんじゃないの？」

「ええ、そうなんですよ〜」・・・ってあれ？ あたしになにか欲しいなんて言いました？」

「あなたの考えてることなんてすぐに分かるよ」

「えへへー、それがですねえ。猫を飼いたいなあ・・・、なんて思ったりして」

「・・・猫？」

「はい！ この猫です！」

どこからか出した雑誌に載っていた猫は、なるほど確かに可愛い。

「それで！ どうでしょうか！？」

「えっ、なにが？」

「だ・か・ら！ 飼ってもいいですか？」

まあ、今までに何かを飼ったこともないし、たまにはいいのかなあ・・・。

「そうだね、金がしっかり世話するっていうのなら、飼ってもいいよ」

「本当ですか！？」

「ダメです」

いきなり、というかいつの間にか金の背後に立っていた男が却下した。

「うわあ！」

「そんなこと言って、絶対に世話はしないんですから、見てるだけにしなさい」

「あら、白おはよう」

「おはようございます、葉一さま」

白と呼ばれるこの男は、金と共に葉一の世話をすると、秘書のような補佐のようなこともこなす大変有能な男である。

切れ長の目に黒いショートヘア、銀縁のメガネがインテリの印象を深めている。背丈もすらっと長く、185cmある。普段から黒スーツに真白なワイシャツで黒ネクタイというそれこそ執事のような格好で、年齢は金と同じ二十四だ。

「たまには飼ってもいいんじゃない？」

「そうですよ、葉一さま公認ですよ！？」

「ダメです。いくら葉一さまがいいと仰っても、あなたは世話をしないこと確実なんですから、それが条件だというのなら、とても認められませんね」

「金ってそんなに世話嫌いななの？」

「いえ、世話が嫌い・・・というより、飽きてしまうんですよ」

「ああ、なるほど。要するに、始めは可愛いし楽しくてしょうがないけど、段々興味が薄れて面

倒になるってこと？」

「ええ、まさにその典型例といったところですね」

「そんなことはありません！　ちゃんと世話しますよ！」

「私がいる前では、通用しませんよ」

「っぐう・・・」

さすがに二人は付き合いが長いので、白は金の抑え方を心得ている。

「どうしても白は金が飼うのに反対なんだ？」

「ええ、例え葉一さまの許可があろうとも、途中で世話を投げ出すことが目に見えて——」

「じゃあ、私が飼うよ」

「ですから、いくら葉一さまが——なんですって？」

「だから、金が飼うのに反対だっていうなら、私が飼う」

「葉一さまぁ・・・！」

感激した金は涙を溜めて葉一に抱きついた。

「葉一さま、後悔しますよ」

白は慌てて止めに入るが・・・。

「いいの。確かに金だけが飼いたいっていうなら私も止めたかも知れないけど・・・」

「と、言いますと？」

「私も気に入ったのよ、この猫」

「・・・そうですか、そう仰るのであれば、すぐに手配いたしましょう」

「お願いね」

「よーし！　じゃああたしも今日は余計に張り切っちゃうぞー！」

「いえ、あなたはダイニングで寛いでいて結構です」

「なんでえ！？　洗濯とか料理とか色々あるのに！」

「全て済ませましたので」

「全部・・・？」

「白は本当にやること早いね・・・」

「ですから、あなたは朝食を食べたら喫茶店のほうをお願いしますね」

「はい！」

金は今にも踊りだしそうな勢いで飛び出していった。

「そしてフォローも完璧、と。相変わらずだね、白は」

「これも私の務めの内ですから。では猫の手配をしてきます」

「うん、よろしくね。私も後ですぐ喫茶店のほうに出るから」

「分かりました」

「ふんふんふ～ん」

鼻歌を歌いながら喫茶店の台所で仕込みをしているのは金だ。やる時はやるもので、喫茶店に来てから二十分で五十人分は作ってしまった。

ちょっと多すぎたかな・・・。まあいいか、多すぎたらあたしが食べればいいもんね。

金は見た目によらずかなり食べる。寿司屋へ行ったら一人で三十皿は余裕というほどだ。それなのに体重はもちろん、スタイルも変わらないという世の女性が羨む体質である。

「金、準備は出来た？」

ちょうど金が仕込みを終えた頃、朝食を終えた葉一が入ってきた。

「あ、葉一さま。はい、ちょうど仕込みが終わったところですよ」

「そう、ありがとう。白ももうすぐこっちに来ると思うからOPENにしようか」

「はい」

喫茶店の入り口に掛けてあるCLOSEの札をOPENにひっくり返した。

「うー……ん！ 今日もいい天気だなあ」

この喫茶葉月はN県のとある山の中腹に建っており、緑豊かで近場には湖もあるという好条件のためか、登山者やピクニックに来る人たちからも人気が高い。

「さてと、他の仕事もすぐ済ませちゃおっと」

やる気全開で店内に戻ろうとした時、一人の小さなお客さんがやってきた。

「このお店、まだ準備中ですか？」

長い黒髪にちょっと街までお出かけというようなオシャレな格好をした、小学五年生ぐらいの女の子だった。

「いらっしゃいませ。ちょうど開店したところですよ」

少しかがみ、笑顔で答えた。

「ここ、喫茶葉月ですよね」

「そうですよ」

女の子は安心したような笑みを浮かべた。

「お邪魔しますね」

「はい。いらっしゃいませ、一名ご来店で一す」

## 天才少女の悩み

---

「ええ、そうです。その猫を一匹。なるべく大人しい子をお願いします」

「大丈夫ですよ。大人しいと言いますか、非常に賢い子猫がいますのでその子をお届けいたします。子猫でもよろしいですか？」

「子猫ですか・・・」

子猫のほうが愛着も湧いていいかも知れないな。

「分かりました。その子猫をお願いします」

「ありがとうございます。ご希望の日時などはございますか？」

「今日の十時までをお願いします」

「はい・・・あのう、『今日の』十時。ですか？」

「そうです。今日の十時です。無理は承知ですが、その分支払はずみです」

無理は承知。というのも、依頼しようとしているのは、麓から車で二時間のところにあるペットショップだからだ。というのも、その猫を扱っているところでなおかつ配達が可能だったのがこのペットショップだけだったからだ。

「お願いできますか」

さすがに難しい、というか無茶な注文なだけあって、電話の向こうではかなり悩んでる様子だったが、しばらくして、

「分かりました。出来る限り早くお届けいたします」

と返事が来た。

「ありがとうございます。では、よろしく願いいたします」

電話が終わると同時に、元気の良い金の声が聞こえてきた。

「は一い。いらっしゃいませ、一名ご来店で一す」

「おっと、もうお客様が。急ぎますか」

早足で店内に入ると、そこには小さな女の子が真ん中のテーブル席に一人陣取っていた。

「お待たせしました」

「あ、ちょうど良かった。金、後は白にやってもらって仕込みのほうお願い」

「仕込みですか？ それならもうやりましたけど」

「何人分？」

「五十人分は」

「じゃあ追加で百人分お願い出来る？」

「百人分？ ちょっと多くないですか？」

「今日はいつもより良い天気だし、お客さん多くなりそうな気がするんだよ。余ったら食べていいから」

「そうですか、分かりました」

金は少し戸惑いながらも仕込みをしに厨房へ向かった。

「それにしても、まさかあの方より早いお客様とは、驚きましたね」

「そうだね。いつもあの方が一番にお店に来るものだから、なんだかこういうのも新鮮かも」

噂をすればとばかりに、その常連はやってきた。

「いらっしやいませ。おはようございます森重さん」

「おお、おはよう葉一。いつものを頼めるか」

「はい。コーヒーとサンドイッチ、それと朝刊ですね」

白髪をオールバックにしてサングラスをかけているこの森重という人は、この喫茶葉月が建っている山の管理人をしており、喫茶にはほぼ毎日顔を出してくれている常連だ。齢八十を超えているにも関わらずそこの若者よりも若々しく筋肉もしっかりしている。

「おや、今日は珍しく先客がおったか」

カウンターに座ってから後ろの少女に気付いた。

「ええ、なんと開店と同時に来てくれました」

少女はさっきから携帯電話をかなり気にしているようだった。

「ん？ あの校章、どこかで見たことがある」

「校章ですか？」

「あの子の肩に刺繍してあろうが」

言われてよく見ると、なるほど確かに。盾のような形の枠の中に一つ大きな星があり、その星から翼がはえているような……。いや、翼が星を包んでいるのか。

「この辺りの学校ですかね？」

「いや、あれは確かT都にある……。なんと言ったかの。全国的にも有名校だったはずじゃが……」

「聖星女学院の校章ですね」

「白知ってるの？」

「少し前に学院始まって以来の天才少女が現れたと話題になりましたから」

「おうそうじゃ、確か名前は——」

「吉本早百合です」

いつの間にかカウンターのところまで来て、女の子は言った。

「学院創設以来の天才として、日本全国にその名が知れ渡りました」

「なるほど、話題になるはずだ」

「そして、その天才少女と言われる吉本早百合というのが私です」

「……こりゃ驚いた。まさかお嬢ちゃんがあの吉本早百合とは……」

「夏休みで避暑に来たのかな？」

「ええ、まあ……。あの」

「どうしたの？」

「しばらく、ここに通ってもいいでしょうか」

「それは構わないけど、そういえばご両親は？」

両親のことを聞かれ、ぐっと黙るが、決意したように話し出した。

「実は、両親には内緒で来ました。その、依頼をしに」

「依頼っていうと？」

「始末屋の葉月という方に依頼があって来ました」

「はあ、やっと終わったー」

若干シリアスな雰囲気の中を見事壊して金が戻ってきた。

「あれ？ 皆さんどうしたんですか？」

「えーと、じゃあとりあえず話を聞こうかな。金、依頼だよ。準備して」

「依頼ですか！？ あわわ、ちょっと待ってくださいね！」

金が慌てて準備をしに奥へ行くと同時に、ペットショップの配達がやってきた。

「ちわー。ご注文のお届けです」

「ご苦労様です」

「あ、今朝話してた猫？ もう届いたんだ」

配達員の持っているゲージには、かわいらしい子猫が入っていた。

「代金のほうは小切手で申し訳ないのですが」

「あ、はい。・・・こんなに！？」

「急がせてしまったお詫びです」

「いやいや、それにしたって・・・」

「どうぞ、お納めください」

「はあ、すみませんね。それではまたのご利用お待ちしております」

よほど金額が大きかったのか、戸惑いながらも受け取っていった。

「子猫・・・？」

「ほお、猫を飼うことにしたのか」

「はい。金に言われたら私も気に入っちゃって。早百合ちゃん、猫好き？」

「え？ あ、はい」

「今はまだ環境に慣れないから借りてきた猫みたいになってるけど、三日もすれば元気になると思うんだ。そしたら遊んであげてね」

「はい」

早百合は子猫をじっと幸せそうに見つめていた。

「さてと、わしはそろそろ帰ろうかの」

「もうお帰りですか？」

「これから仕事じゃろ？」

「すみません、ありがとうございます」

森重は、明日また来ると言って帰った。

「葉一さま、準備出来ましたよ！ ってあああ！ 猫がいるー！」

仕事道具を持ってくると、今度は猫に目を奪われ、抱きつこうとするが、ひらりとかわされた

。

「あれ！？ 猫さんが抱擁をかわした！？」

「そんなわけないでしょう」

もちろん猫の入ったゲージを持った白がかわしただけだ。



「来たばかりの子猫にそんなことしたら怖がるだけです」

「えー、抱っこしたりスリスリしたりしたいのにい〜」

「それはまた今度ね、今は仕事だよ」

「は〜い」

大丈夫・・・なのかな？

一連のやり取りを見ていた早百合は一抹の不安を覚えた。

「さて、これからのやりとりは一応録音と録画をさせてもらうね」

「分かりました」

葉一が目配せすると、金はビデオカメラとボイスレコーダーのスイッチを入れた。

「まず、私たちを知ったきっかけは？」

「お父さんが知人の方と話していたのを聞いて」

「依頼内容は？」

「私の頭脳を歳相応にしてもらいたいです」

「というと？」

「私はまだ小学五年生ですが、感覚も視点も大人と同じ。頭脳にいたっては大学教授と同等とされています。でも私は、こんな頭脳は要らないから同い年と普通の女の子として触れ合いたい、遊びたいんです。なのに学校以外の場所でも例え家の中だろうと私の頭脳を目的に多くの政治家や研究者たちが毎日訪問して難題を解かせようとするんです」

「どうしてそんなに難題を持ちかけるの？」

「私が常人より記憶力・理解力に優れているから、他の人に出せないような答えを出すから。そうした難題を解けば解くほど更に知能が増えていくから・・・。でも、私は普通の女の子として楽しく過ごしたいだけです」

「葉一さま・・・」

「分かってる。でもね、私情を挟んではいけないんだ」

「・・・はい」

「依頼内容と動機は分かりました。望むのであれば、相応の報酬と引き換えに依頼を受けます」

「本当ですか!？」

「始末の方法としては、早百合ちゃんの知能を退化させます」

「知能を退化させる・・・？」

「そうです。何重もの暗示や催眠を用いて天才的頭脳を封印。その上で十一歳ぐらいの子供まで知能を低くします」

「もし、万が一封印が解けてしまったら？」

「その時はまたお越しく下さい。可能性は無いとは言い切れませんので、その場合は無償でまた封印します」

「そうですか。それはどのぐらい時間が必要ですか？」

「本当なら封印してから一ヶ月かけてゆっくり低下させたいのですが、時間のほうは」

「時間ならあります。両親には用事だと言ってあるので心配ないと思います」

「分かりました。ではこの書類にサインを」

提示された書類にサインをすると、安堵の息が漏れた。

「正直、ここが駄目だったら自殺する覚悟で来たので、本当に安心しました」

「自殺は駄目ですよ！」

金が慌てて言うが、早百合は笑顔だった。

「大丈夫です。もうそんなこと考えませんから」

「じゃあ早速今日から始めようと思います。ただ、喫茶店を一ヶ月も閉めるわけにはいかないので、営業中のお店は白と金にまかせるよ」

「了解しましたあ！」

「了解です」

「あの、素人が意見するのもなんですが・・・」

「どうしました？」

「葉月さん一人で大丈夫なんですか？」

「そのことなら心配要りませんよ」

「それならいいんですが・・・」

「伊達に始末屋葉月家の当主をやってませんから。ああ見えて知識も経験も豊富なんですよ」

ああ見えて。というのはどうかと思うが、一見するとただの高校生ぐらい。綺麗なオッドアイが目を引き、おっとりしたかわいい女の子。といったほうがしっくりくるぐらいだ。だが、実力は申し分ない。

「だから、安心して任せてください」

「そういうことなら、分かりました。よろしくお願いします」

「さて、じゃあそろそろお客さんも来るだろうからお店再開しようか。白」

「分かりました」

「これから私は早百合ちゃんの依頼をやるから奥に居るね。何かあったら呼んで」

「わかりました～」

## 今後の方針

---

白と金に店を任せ、二人は喫茶の裏にある葉月宅へ向かった。

葉月の家はほとんど余計なものが無く——金の部屋は例外だが——とても質素で落ち着いていた。中でも葉一の部屋は年頃だというのに雑貨や化粧道具などは一切見当たらなかった。

「葉月さんはお化粧とかしないんですか？」

「ええ、特に必要ないと思って」

「じゃあお手入れとかは」

「特にしてませんよ。入浴剤も特別な洗顔とかも使ってませんし」

「他の一般女性が聞いたら羨ましがるでしょうね」

「そうですか？ 私は普通にしているだけなので特に意識したこともないですし、言われたのは早百合ちゃんが初めてです」

葉一は話しながら椅子を用意したり鏡を用意したりと準備をテキパキとこなしていた。

「じゃあ彼氏とかはいないんですか？」

「いませんよ。昔から出会いもないですし、お客さんからはお世辞を何度か言われるぐらいでそれは多分、お世辞とかじゃないんじゃ……。

なんとなく、葉月葉一の人物像が掴めた気がした。仕事はしっかりこなしているし、表も裏も実力はかなりのものなのだろうが、少し……いや、かなり恋愛面では鈍い。

多分私と同じなんだ。一見すると普通の女の子でもすごい技術や知識を持っている。けどやっぱり中身は普通の女の子だ。ただ育った環境が特殊だっただけで……。

「さて、準備出来ました。そこの椅子に座ってください」

早百合は指示された通りに椅子に座った。

「じゃあ、始めますね。目を閉じて、ゆっくり深呼吸をして、言う通りのことを思い浮かべてください」

葉一の言う通りに深呼吸しながら言われたことを思い浮かべ、徐々に意識が奥底に落ちていった。

「金、三番テーブルにビールを三つ」

「はい！」

昼過ぎになると、やはり登山者やハイキングに訪れたお客さんで賑わった。そのほとんどが常連で、金や葉一目当てのお客さんも少なくない。

「やあ金ちゃん、久しぶり。今日は葉月ちゃんは居ないのかい？」

「あ、お久しぶりです。マスターなら奥で別の仕事してますよー。残念でしたー」

普段は「さま」を付けているが、喫茶店では葉一をマスターと呼ぶ。さすがに喫茶店内で葉一さまはおかしいのでそうしている。

「なんだ、久しぶりに会いに来たのに残念だな」

ははは、と笑いながらビールを飲む。これで三杯目だ。

「おじさん飲みすぎは良くないですよ」

追加のビールを置いていつものように忠告する。

「なあに、まだまだ序の口だよ！」

「金、五番テーブルに運んでください」

「あ、はい！　じゃあまたね」

「葉月ちゃんによろしく！」

うーん、ちょっと動きづらいなあ。

普段は白と二人なのでなんとか動けたが、さすがにこう忙しいと和服での移動は辛いものがあった。

「金、ちょっと着替えてくるね」

「早目をお願いしますね」

「はい」

ここ喫茶葉月では、特に制服の使用を義務付けているわけではないので、二人とも普段の格好のまま出るのが、金の場合は特に和服のため動きづらいということもあり、忙しい場合には特製の軽装を用意してある。

「これでよしっと。お待たせー」

「おお！　久しぶりだね、金ちゃんのその格好！」

葉一のファンがいればもちろん金のファンもいるわけで、そのファンが好きな格好がこの軽装だ。

「えへへー、まだシーズンにはちょっと早いですけど、今日は忙しいので着替えました」

「いつもの和服姿もいいけど、やっぱりこっちだな」

酒が入っていることもあり、上機嫌な客はべた褒めした。

「さて、お仕事再開！」

閉店後、葉月宅の居間で今後について話し合われた。

「金、白、お店のほうはどう？」

「今日は葉一さまの予想通りシーズン並みに混みましたが、なんとか」

「そう。金もお疲れ様」

「あう〜」

白がいない分、二人分の忙しさで疲れたのだろう。帰ってくるなりソファに倒れた。

「服着替えたら？」

「お風呂入るまではこの格好にしますー……。着物に着替える元気ないです」

「そっか」

金の姿に、葉一は思わず笑みを浮かべた。

「それより葉一さま、早百合ちゃんのほうは」

「うん。今は落ち着いて寝てるよ。複数の暗示や催眠をやるからね、大分負荷がかかったみたい。頭脳は大学教授だって言っても、中身は十一歳の女の子だからね」

「そうですか。封印にはどれほどかかりそうですか？」

「そうだね・・・。これからの経過にもよるけど、多分一ヶ月はかかると思う。少しずつやるしかないからね。知能を小学生レベルにまで戻すのも下手したら一ヶ月かかっちゃうかも」

「それでは少し時間がかかりすぎますね」

「そうなんだよ。それにもう喫茶店のほうもシーズン入りするからね、いつまでもこの状態だと・・・」

金を横目に見ると、起き上がる気配が全くない。

「金が倒れちゃうかも知れないしね」

「頑張りやなのはいいですが、体力が持ちませんからね」

「う～、明日からお休みにしません？」

「そういうわけにはいかないでしょう。最低あと一ヶ月は頑張ってもらいますよ」

「一ヶ月！」

絶望したように叫ぶと、全身の力が抜けたようにソファに沈んだ。

「参りましたね・・・。適当なアルバイトを入れるわけにもいきませんし」

「役割交換とかは？」

「それですよ！」

それまで死んだようにソファに沈んでいた金がかげと起き上がった。

「駄目ですね」

が、一蹴された。

「なーんーでー！？」

「金の料理センスは絶望的ですからね」

「そんなことないもん！ ねっ、葉一さま！」

「うーん・・・。ごめん」

「ガーン！」

今度はショックでソファに沈んだ。

しかし事実ではあった。センスの問題かどうかはいささか疑問ではあるが、なぜかレシピ通り作っても味がおかしくなるので、それを知っている白はなるべく金には調理させないようにしているぐらいだ。

「どうかしましたか？」

「早百合ちゃん？」

目が覚めてしまったのだろうか、いつの間にか廊下が続くドアのところに立っていた。

「起こしちゃった？」

「いいえ、目が覚めてしまって。トイレを借りた後で明かりを見付けたので」

「そう、ホットミルクでも出そうか？」

「大丈夫です。それより皆さん揃って・・・団らんの最中でしたらすみません」

「大丈夫。これからのお店のことをちょっとね」

「お店の？」

一応葉一は早百合に現状を説明した。

「そうだったんですか・・・。私のせいで大変なことになってたんですね・・・」

「早百合ちゃんが気にすることはないよ。これも私たちの仕事なんだし」

「そうですよ。金が一ヶ月頑張れば済む話ですから」

「だから無理ー！」

「あなた一体なんのためにここに居るんですか」

「そんなこと言ったって〜！」

「はあ、なら私もお手伝いしましょうか？」

「駄目駄目、そんなことしたら本末転倒だよ」

「そうですね、すみません。私ったら寝ぼけてるのかな」

「早百合ちゃんは自分のことに専念してて大丈夫だよ。今日は慣れないことやったし、ゆっくり体を休めて」

「はい、ありがとうございます」

早百合が戻ると、時間も遅いということで、会議は後日に持ち越されることになった。

## もう一人の早百合

---

翌朝、天候は雷雨となった。これではお客さんもまず来ないということで店は開けないことになり、金は休めると大喜びだった。

「天は我に味方せりー！」

「調子に乗っていると、これから先ずっと快晴かも知れませんよ」

「うっ、嫌なこと言わないでよー」

そのため今日は三人で封印の作業をすることになった。

「早百合ちゃん、今日はちょっと強めにやるから、精神的に辛いかも知れないけどいい？」

「はい」

「白と金もサポートとフォローよろしく」

「了解しました」

「了解です！」

「じゃあ始めるね」

昨日と同じように、早百合は目を閉じ、深呼吸をして指示されたことを思い浮かべると、徐々に意識を沈めていった。

暗示や催眠と言っても、始末屋として葉一の行うのは「どんどん忘れていく～」といったものではない。専用のお香を使ったり、催眠で心を開かせたりして耳元で囁きながら、封印したい事柄等を暗示と共に忘却へ導いていく。それを地道に根気良く続けるのだ。

今回は一段と強いお香や催眠を使い、より深い根のような部分を忘却へと導いていく。しかし、これは心の深い部分をえぐるようなもの。相手によっては精神崩壊すら招いてしまう恐れがある。そこで必要なのがサポートとフォロー役の二人、金と白だ。

二人は精神崩壊しないよう、暗示を中和する役割を担う。この作業においては金は秀でた技術を持っているので特に重要な役と言える。もちろん葉一も白も心得はあるが、葉一がそれをやると抑えようとしていた部分が一気に逆流し、逆に精神を壊してしまう恐れがある。白の場合は万が一に備えての待機だ。中和が間に合わなかったりイレギュラートラブルが起こった時に相手を物理的に押さえ込み抑制する。もしそれが無理な場合は強制的に意識を飛ばす。

こうして見るとかなり危険であり拷問のような感じだが、この三人の連携が上手くいくとこれ以上ない効果を生む。

早百合が催眠に完全に落ちたのを確かめ、葉一がお香を嗅がせながら耳元で囁き始めた。

何事もなく順調に進んだが、終わりかけた時急に早百合の体が痙攣した。

「金！」

「分かってる」

早百合に駆け寄ると、即座に耳元で中和の暗示を囁き始めた。

葉一も徐々に暗示を弱めるが、一分経っても状態が落ち着かない。

どうということ？ 今は金の中和のほうが強いはずなのに・・・。

更に一分が経つが、収まる気配がない。逆流を防ぐためにも二人が暗示を止めるわけにもいかない。それにこの状態がこれ以上続くのも精神的に限界を迎える。

ここまでか・・・。

葉一は白に目配せで指示を出した。

白は頷くと早百合に近寄り、首に的確な手とうを当てた。

それまで強い痙攣をしていた早百合は意識を失い、椅子に力なくもたれた。

「ありがとう白」

「いえ」

「ごめんなさい、葉一さま。あたし・・・」

「謝らなくてもいいよ、落ち込むこともない。金のサポートは完璧だった。ただ・・・」

「何か気になることが？」

「うん。白も気づいていたと思うけど、あの時はもう終わる直前だったの」

「はい。私も金もつい安心してしまいましたけど・・・」

「ところが、精神の奥深く、どこかに強い拒絶の領域があったみたい。多分そこに触れたからだよ、強い拒絶反応が起きたのは」

「しかし、本人はそういったことについては一切言ってませんでしたから、無意識に壁を作っているのでしょうか」

「可能性はあるね。それがどんなものにせよ、今は早百合ちゃんの回復が最優先だね」

「一応手加減しておきましたので、目は覚めるはずですが」

「そう、ありがとう」

生まれながらにして天才的頭脳を持ち、特殊な環境で育った十一歳の少女。心になんらかの壁があるのは当然かも知れない。

三時間ほど経ち、金から目が覚めたと報告があった。

「様子はどう？」

「それが、異常はなさそうですし、自分で起き上がったんですけど話をしてくれないんです」

「話さない？」

二階にある早百合の部屋に入ると、確かにベッドに起き上がった早百合が居た。

「早百合ちゃん？」

葉一が話しかけると、早百合はゆっくりと葉一のほうへ向いた。

「・・・。あなたね、あたしの領域に侵入したのは」

「領域？ 早百合ちゃん・・・だよ」

「あたしは吉本桜花。この子の、早百合の姉よ」

「早百合ちゃんのお姉さん？」

一同が戸惑っていると、桜花と名乗るその子は説明を付け加えた。

「姉といっても早百合の実の姉じゃないわ。この子は一人っ子。別人格って言ったほうが分かりやすいかしら」

「別人格！？」

「ええ、平たく言えばね。あなたが葉月葉一さん？」

「ええ、そうだけど」



「そっちの金髪美女が確か金さんで、執事みたいなのが白だったかしら」

「そ、そうですけど」

「その通りです。あなたは別人格だと言いましたね」

「だから？」

「では早百合ちゃんは今？」

「中で眠ってるわよ。あなたでしょう、この子を気絶させたのは」

「・・・はい」

「まあ起きないことはないでしょうけど、早百合が目を覚ます前にあなたたちに一言言いたくて出てきたの」

「言いたいこととは」

「これ以上この子とあたしに関わらないで」

「そんな！ それじゃ契約違反になっちゃいますよ！」

「違約金とかだったら吉本社長からたっぷり貰えばいいわ」

「早百合ちゃんの意味はどうなるの」

「関係ないわ。この子はあたしが助言すれば納得するはずよ」

「じゃあ一つ聞くけど、ここに来るまでに始末屋のことやそういった悩みについて相談されたことはある？」

「っ！」

葉一の言葉は一気に核心をついた。様子から見ると、相談されたことはなかったようだ。しかもそのことを気にしていたらしく、一気に不機嫌になった。

「うるさいわね！ そんなこと関係ないでしょ！」

「関係あるよ。ねえ、少しお話ししない？」

「ほっといてよ！」

キッと睨みつけてそう言うとベッドに潜り込んだ。

「体調が戻ったら勝手に出て行くから、もう関わらないで」

「葉一さま・・・」

「今はそっとしておくしかないみたいだね。白、お願いね」

「了解しました」

居間に戻ると、三人は同時にため息をついた。

「別人格かあ、あたし初めて見た」

「私もだよ。でも、これではっきりしたことは、あの時強い拒絶を示したのがあの子、桜花だってことだね」

「しかし疑問があるのですが」

「私たちに打ち明けなかった理由、でしょ」

「はい。桜花の言葉を信じるのならば、相当長い間柄のはず。しかし契約時や封印の時には一切話しませんでした」

「一緒に封印してもらいたかったんじゃないかな？」

「それもありそうだね。じゃなきゃ桜花だけは触れないで残しておいて。とか念を押したはずだし。でも、疑問はもう一つある」

「と言いますと」

「あの子、早百合ちゃんだよ。天才って感じした？」

「そう言われてみれば普通の女の子でしたね」

「そう振る舞っていただけでは？」

「もしかしたら、本当に天才だと言われたのは桜花のほうなんじゃないかな」

「ええ！？　じゃあ早百合ちゃんのごく普通の女の子だってことですか？」

「うん。本当は『普通の女の子』を望んでいるのは桜花のほうなんじゃないかな」

「それなのに桜花が消されそうになり、慌てて出てきた。本末転倒になってしまいますからね」

「まあ憶測でしかないけどね。とりあえず今は様子を見るしかない」

「ところで桜花って子はほっておいていいんですか？　勝手に出て行くとか言ってましたよ？」

「それなら心配要らないよ。白に頼んでおいたから」

「え？　何したの？」

「発信機をあの子の靴に仕込んでおいたんですよ」

「すごーい。でもすぐバレちゃうんじゃない？」

「大丈夫ですよ。埋め込んでおきましたから」

「いつの間に・・・」

「とりあえずこれで監視は十分。あの子が全てを話してくれるまで、始末屋としてのお仕事は一時中断ということで」

「じゃあ明日からは喫茶店を通常営業するってことですか？」

「そうだね。明日からは私も出るから、金は安心していいよ」

「やったー！」

「それと、白にちょっとお願いがあるんだけど」

「なんでしょうか」

「あの子の身辺調査とかお願い出来るかな」

「お任せください」

「えっ！？　じゃあもしかしてあたし一人？」

「心配ないよ、お客さんの少ない夕方をお願いするから」

「良かったー」

「にゃー」

「あれ？」

話し声を聞きつけてか、猫がやってきた。

「金、ゲージはどうしたの？」

「あ、あはは」

「閉め忘れたんですね」

「すみません」

しゅんとしていると、猫が寄ってきた。

「にゃ？」

金の顔を見ながら足に顔を擦り付けた。

「か、か、かわいい～！」

抱きしめたい衝動を抑えつつ、頭を撫でてやると、気持ち良さそうにゴロゴロと喉を鳴らした。

すっかり猫に心奪われた状態の金は、寝転がりながら猫と戯れた。

「そういえば、猫の名前決めないとね」

「葉一さまにお願いしていいでしょうか」

「私？ いいけど」

「私もそうですが、金もネーミングセンスはありませんので」

「あはは、了解」

予想外の展開ではあったが、ひとまず落ち着いて様子を見ることに決まった。

翌日、受信機を見るまでもなく、靴はまだ玄関に置かれていた。

「金、様子はどうだった？」

「朝食を運んでいったんですが、要らないの一点張りで・・・」

目玉焼きと焼き魚を乗せた皿を下げて金が下に戻ってきた。

「そう・・・。話してくれない以前に食事はちゃんととらないと体に悪いんだけどなあ」

「何か食べたいものはある？ って聞いてもほっといてって言うだけですし」

「本当に関わりたくないようですね」

「とりあえずお店は開けないとね。金、白、準備するよ」

「はい」

「了解しました」

昨日とは打って変わって今日はとても良い天気だった。登山者やハイキングに訪れる人、常連の人、いつもながら様々な人が来店してくれた。

「白、ビールを三番にお願い。金はホットドッグを五番に」

「今行きまーす」

「マスター、六番テーブルからです」

「ありがとう。あ、パンが切れてきたからちょっと補充してくるね」

「分かりました。しばらくカウンターに入ります」

「お願い」

葉一はカウンターから出ると材料を置いてある小さな倉庫へ向かった。

「えーと、パンは確かこの辺りに・・・あった」

パンを取り、倉庫から出ると足音が聞こえた。

誰だろう・・・白かな。

そっと音の方向を見ると、早百合が出て行くところだった。

早百合ちゃん？ それとも桜花？

どちらにしろ、向こうが動いてくれたのは都合が良い。発信機が仕込んである靴も履いていた。

店に戻ると、カウンターを預かってくれていた白に伝えた。

「ありがとう。白、蛇が動いたから様子見てくれない？」

「了解しました」

蛇とは、始末屋で使っている用語の一つで、始末対象のことを示す。

カウンターから出ると、すれ違いに金にも伝える。

「蛇が動きました。様子を見てきます」

「分かった」

少数人数だからこそその簡潔な連携、始末屋葉月の自慢でもあった。

「金ちゃん！」

「はい！」

お客に呼ばれ、金は笑顔で答えるとそのままテーブルへ向かった。

受信機を見ると、どうやら山を下っているらしい。

昨日からあまり精神的に回復していないはず。その上食事もとっていない。あまり遠くへ行けないはずですが。

予想通り、受信機の光点は下山手前で止まった。

近くへ行くと早百合の姿が見える。

話し声？

誰かと話しているようだったので近くの木に隠れる。

「そう、でもちゃんと話せば分かってくれるんじゃないかな」

携帯電話は使っていない。ということは桜花という人格と話しているのだろうか。

「桜花にとって、これは唯一の希望でしょ？」

都合よく桜花の声が聞こえないので推測しながら聞き取るしかない。

「もう桜花は一人じゃない。葉月さんたちがいるじゃない。・・・もし何かあったら葉月さんたちがきっと守ってくれるよ。・・・ううん、私も桜花の味方だよ。・・・だから戻ろう？・・・

・携帯電話？何かあったら葉月さんに連絡しようと思って。・・・え！？発信機！？」

早百合の様子を見るのに気を取られていた白は、その言葉で周りの気配に気付いた。

！気配を殺している・・・。訓練されてますね。相手は三人。仕方ありませんね。

「で、でも、誰もいない・・・よ？」

(ウルフを忘れたの！？あいつらは影よ！いつどこから来るか分からない！)

「どうすれば——」

「動かないでください」

「ひっ！」

いつの間にか後ろに立っていた黒スーツの男が威圧した。

どこに隠れていたのか、同じ格好の男が二人目の前に現れた。

「さあ、戻りましょう」

(早百合！あたしに代わって！)

「いや！」

(早百合！？)

「社長が心配なされていますよ、桜花様」

「やはりそうでしたか」

「誰だ！？」

慌てて桜花を囲もうとするが、そこに桜花の姿は無かった。

「桜花様！？」

「こっちですよ」

「ぬう！」

声の方向を見ると、そこには白が立っていた。

「誰だ貴様！桜花様をどこへ連れて行った！」

「この程度の動きが見えないとは、大したことありませんね」

「なんだと!？」

「大丈夫でしたか？ 早百合・・・じゃなかった、桜花ちゃん」

「金さん!? なんでここに!？」

「あたしと白はお互いの場所が分かるんです」

「葉月さんは？」

「まだお店にいますよ」

「早く逃げないと！」

「どうしてです？」

(まどろっこしいわ! 代わって!)

「あ、うん。桜花に代わります」

「えっ？」

早百合が目を閉じてゆっくり開くと、明らかに雰囲気が変わった。

「さっきはごめんなさい。桜花です」

「あれ!? 人格が変わった??」

「説明している暇はありません! 早く逃げないと！」

「逃げないと、どうなるんです？」

慌てて説明しようとしているところに、何事も無かったかのように白がやってきた。

「えっ? う、ウルフは？」

「あれはウルフと言うのですか、少し眠ってもらいました。金、家まで運びますよ」

「はい。歩ける？」

「は、はい・・・」

事態が掴めないまま、桜花は二人と一緒に葉月宅へと戻った。

玄関まで来ると、黒スーツの屈強そうな男三人を白が手早く縛った。

「これでよし。桜花さんは閉店までの間、喫茶店のカウンターでお茶でも飲んでいてください」

「じゃああたしは先に行ってるねー」

「お願いします」

「えと、あの・・・」

「積もる話は夜、あの男たちと一緒に伺います。今は喫茶店でお客様と楽しくお茶をしてください。今回はサービスしますので代金は結構です」

「分かりました・・・」

よほど想定外のことだらけだったのだろう、半ば放心状態になりながらも喫茶店へ入った。

「白と早百合ちゃん、おかえり」

「ただいま戻りました。桜花さんこちらに」

桜花を招き、椅子を引いてあげた。

「ありがとう・・・」

「なんだ葉一ちゃん、隠し子か!？」

「そんなわけないでしょう、迷子ですって」

「迷子？ お父さんかお母さんとはぐれちゃったのか」

「とりあえず今日はうちで保護して、明日親御さんのところへ送ります」

「そうかい、お嬢ちゃん、名前は？」

「えと、おう・・・早百合です」

「早百合ちゃんか、良い名前だねえ。山は初めてか」

「はい」

適当に合わせて答えるが、桜花にとってはとても新鮮だった。政治家でも研究者でもない一般の気の良いおじさんと他愛も無い話をするのがこんなに楽しいなんて初めてだったからだ。さっきまできょとんとしていたが、すぐに笑顔になった。

「でな、おじさんはこの山で熊に襲われちゃったわけだ。その時に死んだ振りをしてたら勘違いした仲間が殺されたと思っておじさんを置いて逃げちゃってよ！」

「あはは！ 駄目じゃないですか、熊は死んだ振りしても意味無いんですよ」

「おお、よく知ってるな！ おじさんもその後管理人の森重っておじさんに怒られちゃってよ。死にたいのか！ ってな！」

なんだかんだで楽しい時というのは早く過ぎ去ってしまうもので、気が付けば夕方になり、閉店になっていた。

「それじゃあな、またここ来たら話そうぜ」

「はい、お気を付けて」

最後の客が帰ると、表の札をCLOSEにして片付けを済ませた。

「どうだった、早百合ちゃん」

「あ、遅れてごめんなさい。あたし桜花です」

「あ、桜花ちゃんか。ごめんね」

「いえ、とても楽しかったです。家ではこんなことなかったもので、新鮮でした。いつも化学式やらアルゴリズムについて考えてるだけなので・・・」

「どんなリズムですか？」

片付けながら金が不思議に聞いた。

「あはは、音楽じゃないですよ。簡単に言えば仕事の手順みたいなものです」

「へえ！ なんかかっこいい」

「さて、片付けも済んだことだし、向こうでお話聞かせてもらってもいいかな？」

「はい。全てお話します」

喫茶店での新鮮な体験に刺激されたのか、今までにない素直な瞳だった。

店を閉めて家に戻ると、リビングで桜花が話し始めた。

「皆さんお気付きの通り、本当の天才と言われた人格はあたし、桜花です」

「なんでわざわざ早百合ちゃんを使ってここに？」

「なかなか決心のつかないあたしに業を煮やして勝手に来たんです。あの子忘れっぽいから封印の時も早百合のままです」

「そうか、自分で進めてしまおうと思って肝心の桜花ちゃんのことを忘れてたってことか。じゃあ、桜花ちゃんはなんで姉だって言ったの？」

「あれは個人的な人格の設定です。妹が欲しかったので早百合を創って、私が姉になる。ということですよ」

「それで、ここから逃げ出したわけは？」

「実は・・・ウルフが動いたという報せがあったので」

「ウルフってこの三人？」

「はい。お爺ちゃん直属の諜報部隊です。あたしの味方である偵察の人が報せてくれて、これ以上ここにいても迷惑になると思い」

「それが心配でここに来た時から携帯電話を気にしてたんだね」

「はい」

「桜花ちゃんの話は分かった。後はこのウルフって三人だね。白」

「はい。そろそろ起こしますか」

「どうやって起こすの？」

「こうします」

白はバケツ一杯の水を持ってきて、躊躇なく三人にぶっかけた。

「うわああああ！」

「目が覚めましたか」

「あ？・・・貴様は！」

「この方たちを貴様呼ばわりするのはあたしが許しません」

三人の男たちの前に立って毅然と言い放ったのは桜花だった。

「桜花様！　しかし、この者たちは誘拐犯なのでは」

「誘拐？　なんか面白そうなことになってるね。詳しく聞こうか」

葉一は椅子に座って三人を鋭い目で見つめた。

「あんたら、会長直属のウルフって諜報部隊らしいね」

「なぜそれを！？」

「桜花ちゃんが全て話してくれたんだよ。それと、うちの優秀なのが色々調べてくれたしね」

「・・・」

「でも一つ疑問があるんだよね。あんたらの持ってる拳銃。なんで通常弾も持ってるわけ？」

「そ、それは・・・」

しどろもどろになるウルフに桜花も気付いたようだった。



「もしかして……。戻らないようなら暗殺を命じられていた？」

「っ！」

ウルフの動揺が、何よりの証拠となった。

「どういうこと？ あたしはお父さんにただ用事があると言ってここに来たのよ？ なのになんでお爺ちゃんがそんな命令するのよ！」

「じゃあ、命令の内容を言ってもらおうか」

「そ、それは出来ない」

「あそ、じゃあ幸三会長に失敗のこと伝えるね」

「そ、それだけは！」

「桜花ちゃんはどうなってもやっぱり自分が大事？」

「……。条件がある」

「条件次第では飲みましょう」

「暑いので服を脱がせてくれないか」

「え？ でもここは——」

言いかけたところで白が桜花の口を封じた。

「そうですね、こう暑いと何も出来ませんから」

「助かる」

別に暑くなんか……。そうか！

そう、服には発信機はもとより盗聴器もあるはず。それらを仕込まれた服を着て話すのは裏切りを公然と宣言するようなものだった。

脱いだ服は洗濯機に放り込んで水だけ入れてスイッチを入れた。これでとりあえず会話が聞こえることはない。

「多分、気付かれたと思うけど、監視者との距離は？」

「おそらく麓で待機しているはずだ」

「じゃあ異常を察知してここに来るまで少し時間があるね。車で移動しながら話そう」

「にゃあ？」

「この子どうします？」

なぜか猫が玄関で待機していた。

「置いてくのも心配だけど、連れて行くのもなあ」

「ゲージに入れて移動しましょう。時間もないですし」

「そうするか」

「にゃあ」

猫は分かっているように嬉しそうに鳴いた。

事の発端はほんの小さな計算違いだった。

桜花はいつも通りに研究者の持ってきた資料を元にコンピューターのアルゴリズムを作成。しかし、そのアルゴリズムに小さいが大きな欠点があった。

その事によって吉本幸三会長が暖めていた大きな計画に支障をきたしたという理由で、幸三の逆鱗に触れたのだった。

「ひどい……。そんなことで桜花ちゃんを殺すっていうの？」

「それは我々にとっても本当に最終手段なんだ。どうしても戻らないというのであれば機密保持のために……」

「それでも、殺すという選択肢があるっていうのは尋常じゃないね」

白の運転で山を越えると、監視者が待機している麓の反対側に出た。

「さて、事態が急展開になっちゃったわけだけど、依頼はどうする？ 桜花ちゃん」

当初の依頼は封印と知能の低下だったが、事態は変わった。本来の人格である桜花の登場、幸三会長直属のウルフの登場。これからどうするのかは、桜花に委ねられた。

「追っ手はまず来ないでしょう。桜花さんの携帯電話は桜花さんの部屋に、ウルフのスーツは洗濯機の中ですからね」

「ただ、一つ面白いことになってるんだよね、どうやら私たちは桜花ちゃんを誘拐したことになる」

「会長は、誘拐犯のせいにしたほうが都合が良いと言っておられた」

「なるほどね、それなら救出の時に間違っただけで桜花ちゃんが死んでもなんとでも言えるわけだ」

「本当ひどいですよね！ あれ？ でも桜花ちゃんが戻ってそのコンピューターを直せばいいことなんじゃない？」

「そういうわけにもいかないだろう。今更直したところで計画というのは失敗になっている。失望した会長がやりそうなのは常時監視付きの軟禁生活だ」

「そんな生活、誰も望まないでしょうね」

小さな女の子に全てを押し付け、自由を奪うなんて非道なことを、見過ごせるわけではない。

「でもお爺ちゃんがそんなことをするなんて思えないけど……」

「最近の会長はそうなんです」

「桜花ちゃん」

「はい」

「どうするかは決まった？」

「いえ、まだ……」

「なら、私たちが独断で動いちゃっていいかな？」

「葉一さま！？」

「独断でって、どういうことです？」

「始末屋っていうのはね、始末するだけが仕事じゃないってことだよ」

東京にある吉本グループの本社は地下二階、地上十一階建てのビルで、地下にはリラクゼーション施設があり、社員は疲れを取るのによく利用する。会長、社長、副社長及び重役等は最上階である十一階にて主にデスクワークをこなしている。

その本社の駐車場に、白は堂々と車を停めた。

「これからどうしますか？」

「決まってるじゃない。会長に会うの」

「お前ら正気か！？ 会長に会う前に追い出されるのがオチだぞ！」

「大丈夫だよ。ここからは本業だしね、遠慮なく突破させてもらう」

「殺すんですか？」

真剣な桜花の質問に、三人は笑顔で答えた。

「始末屋だからといって、殺しは極力しないというのが葉一さまの考えです」

「そうですよ一、今までの依頼だって死者0が自慢なんですから」

「だから、桜花ちゃんはここでウルフのおじさんと、猫さんと一緒に待っててね」

言われて桜花が隣を見ると、猫が不思議そうな顔で「にゃ？」と鳴いた。

「はい、分かりました」

「よし。じゃあウルフの三人、桜花ちゃんとうちの猫をしっかりと守ってね」

「分かった」

「それじゃあ、行きますか！」

車を降り、正面玄関から堂々と入った。

会長の居場所はウルフから聞いているので、わざわざ受付に行く必要もない。ウルフから聞いた通りの関係者以外立ち入り禁止の文字が書いてあるエレベーターへ向かう。

「ここだね」

エレベーターの横にはボタンが無く、カード認証の装置があった。

ウルフから借りたカードを通すと、認証は滞りなく成功し、エレベーターが開いた。エレベーターに乗り込み、最上階のボタンを押すと、静かに上り始めた。

最上階に着くと、そこは一流のホテルかのような内装で、本社の玄関からは考えられない造りになっていた。

「これはまた、自分を王様だとでも思いたいのかな」

「すごい、葉一さま、ここ全部大理石ですよ！」

「みただね、赤絨毯もさぞかし高級品なんだろうね」

その赤絨毯を歩き、会長の部屋へと向かう。

一番奥の部屋に来ると、専属らしい受付嬢がいた。

「アPOINTメントは取られていますか？」

「いや、ちょっと急用なものでね。アポは取れなかったんだけど、吉本桜花ちゃんの件について言えば分かると思うよ」

「・・・。失礼ですがお名前は」

「始末屋の葉月葉一」

「分かりました」

受付嬢は電話で会長らしき相手に話を通した。

「どうぞお入りください」

「ありがとう」

必要あるのか？ と疑問に思ってしまうような重厚な扉は案外簡単に開いた。

会長室はなんとも質素だった。最小限のオフィス設備に机にはノートパソコンと電話があるだ

けで、忙しそうとも思えない雰囲気だった。

「君たちかね。私の孫娘を誘拐したというのは」

「いきなり挨拶ですね幸三会長。計画が頓挫したからと孫娘を殺そうとするとはね」

「孫娘を殺す？ なんのことだ」

「ウルフに実弾を持たせたのはあなたでしょう」

「ウルフだと？」

「ええ、そうです。会長直属の」

「いや待て、ウルフはもうわしの部隊ではない」

「どういうことです？」

「ウルフはライバル企業に買収されたよ。裏切り者めが」

「それはいつのことですか」

「つい昨日のことだ。待てよ、そういえば孫娘が誘拐されたという報せも確かライバル企業が・・・」

「ということは、ウルフは最初から桜花ちゃんを消すつもりで？」

「桜花はどこだ」

「駐車場の車の中でウルフと・・・白！」

「駐車場ではないようです。南に三キロほど行ったところでしょうか」

「南へ三キロぐらいといったら、ライバル企業の坂本グループ本社がある」

「金、白、行こう」

「はい」

「了解しました」

行こうとした時、幸三が呼び止めた。

「待ってくれ」

「どうしました？」

「お前らは始末屋だったな」

「そうですが」

「ならば一つ、依頼を引き受けてはくれないか？」

「と、言いますと？」

「言うは易しだが、坂本グループの陰謀を始末して欲しい」

「陰謀ですか？」

「ああ。奴らはことあるごとにわしらを狙っておってな。今回も恐らくは吸収合併のための人質にと桜花を誘拐したのだろう」

「それは企業のためですか？」

「もちろん桜花のためだ。企業などいつでも再建出来る自信が、わしにはある」

強い意志を持った良い瞳だった。

「分かりました。ではご報告にまた戻ります」

「よろしく頼む」

「大人しくしてれば何もしませんよ」

ウルフたちは桜花を誘拐し、坂本グループ本社へと戻り、地下倉庫へと桜花を幽閉した。

「あなたたち、こんなことをしてどうするつもり！？」

「簡単なことだ。嬢ちゃんと引き換えに吸収合併をするんだよ」

「なんですって！？」

「そうすりゃ坂本グループが日本で一番の巨大グループになるってことよ」

「そんなこと、お爺ちゃんが黙っているはずがない！」

「孫を人質に取られているんだ。動けるわけがないだろう」

「卑怯者の集まりね！」

「なんとでも言えばいい」

そこへ現れたのは坂本グループ会長である坂本金太夫だった。金のピアスに金のネックレス、指輪を五個もはめているなんとも悪趣味なお坊ちゃまといった感じの男だった。

「金太夫会長、なんでそこまでして吉本グループにこだわるの」

「ベリーイージーなクエスチョンですね。吉本がわが社と同等の巨大グループであり、日本で五本の指に入るグループだから。そのグループを吸収合併さえすれば日本のトップに立てる。これを逃す手はないでしょう？」

「確か、このグループがここまで大きくなったのも吸収合併が八割を占めてたわね」

「さすが才女。ワンドフルブレインだ。しかし君の時間稼ぎも無駄になるだろう。ここは電波をシャットアウトする特別な地下倉庫。発信機も盗聴器も意味が無い」

読まれてた！

桜花自身はどこに仕掛けられているかは知らないが、以前白が森で助けに来れた理由を考えると発信機以外考えられない。携帯電話は葉月宅の二階、今は葉一が仕掛けた発信機だけが頼りだった。

「さて、我々は幸三会長に合併の話をしてこよう。大人しくしててくださいね。ピークワイエツト」

倉庫の鍵を閉めると、ウルフと自室へ戻っていった。

「ああもう！ 何が最高の頭脳よ！ 肝心の時に！」

(桜花、落ち着いて)

「早百合！？」

(何かあるはず。この状況でも助けを求めるか脱出する何か方法が)

「そんなこと言っても、ここには針金どころか糸くずすらないのよ？」

途方に暮れながらもイライラは募る一方だった。

「こうしている間にも合併の話が進んでるかも知れないっていうのに！」

靴で思いっきりドアを蹴飛ばした。

「痛っ！」

(そりゃ痛いでしょう)

痛がっていると、靴底から何かが落ちた。

「何これ？」

拾ってよく見ると、超小型のデータ端末のようだった。

「端末あってもLANもない電話線もないじゃ・・・あれ？」

よく見ると、端末からコードが延びていて、その先には何やら長い板状のものが付いていた。

「えーと、説明書まで入ってる」

端末の先に付いているのは衛星通信用の小型パラボラアンテナです。図のように展開してください。

「図のように？」

まず板状のものをカチッと音がするまで外側に全て開き、根元にあるダイヤルのようなものを時計方向に回す。

「こうかな」

カチッと回すと、見事に簡易パラボラが出来上がった。

「すごい！ でも通信は・・・小窓があるわね」

小型パラボラアンテナを外に向けつつ、端末の電源を入れると、ちゃんと起動して通信状態もクリアになっていた。

「こんなもの用意しておくなんて、あの人たち本当にすごいわね」

しかし、問題があった。電池がほとんどなかったのだ。

「くぅ！ ここまできて！」

しかし桜花はハッと思い立って、もう片方の靴を脱いで壁に叩きつけてみた。するとやはり何が落ちてきた。

「やっぱり、抜き無いわね、大容量バッテリーまで付いてる」

バッテリーを接続すると、見事電池も復活した。

「やった！」

「桜花ちゃんの場合は？」

「本社らしきところに止まってすぐに光点が消えました。恐らく電波が遮断されてます」

桜花ちゃんがアレに気付いてくれればいいけど・・・！

本社にもうすぐで着くという時に、車載端末に受信があった。

「来た！」

白が内容を確認すると、やはり桜花からだった。

「どうやら地下の倉庫に閉じ込められているようですね。坂本会長は吸収合併に動いているようです」

「しかしよく見付けられましたねー」

「ほとんど賭けでしたが、結果オーライというやつです」

「さて、じゃあ吉本会長のほうにも連絡をお願い」

「はい」

電話をかけると、ワンコールで出た。

「わしだ」

「始末屋の白です」

「孫はどうだ？」

「ご安心を。たった今連絡がありました。恐らく今は一人で監禁されていますので、これから救出に向かいます」

「よろしく頼む」

「それから、くれぐれも合併の話は長引かせるようにしてください」

「分かった」

電話が終わると同時に坂本グループ本社に着いた。

車を降りると、今度は裏口から入った。

「何か合図をするように言って」

「了解しました」

白は素早く端末でメールを出した。

「後は電波の入らない地下倉庫に向かおう」

意外と警備員は手薄で、地下にはなんなく入れた。

「ここからは手分けしよう。金はこのまま桜花ちゃんの救出、及び脱出。私と白は会長の企みを始末してくる」

「了解です」

「了解しました」

葉一と白と別れると、金は一人地下へ向かった。

警備員さんに見付からないようにしないとなあ……。

慎重に下りて行くと、地下三階で行き止まりになった。

「あれ？ おっかしいなあ。合図もないしそれっぽいところも見当たらないけど……」

それでも一応見て回ると、微かに音が聞こえる。

合図かな？

しかし、この革靴独特の音は間違いなく桜花ではなかった。ダンボールの陰に隠れると、やはり警備員だった。

一人かあ、助かったー。

警備員をやり過ごすともた微かに音が聞こえた。今度は太鼓でも叩くようなゴーンという音が聞こえる。

多分これだ！

金は意気揚々と音のするほうへ向かった。

そこには確かに鉄の重そうなドアがあった。

「桜花ちゃん？」

金が呼びかけると、音はピタリと止んだ。

「その声金さん！？」

「よかった～、やっと見付けた！」

「金さん一人？」

「白も葉一さまもいますよ、二人は今坂本会長のところへ向かってます」

「来てくれたのは嬉しいんですけど、このドアは鍵も閉まっているし・・・」

「あ、ちょっと離れててくださいね」

「はい・・・」

言われた通りに離れていると、キンッという鉄の音がして、ドアはバラバラに崩れた。

「お待たせしました～！」

「あの、金さん？」

「はいはい、なんですか？」

「一体何を？」

「斬ったんですよ」

「何で？」

「この自慢の愛刀です！」

誇らしげに手に持っているのは、間違いなく日本刀だった。木の柄に木の鞘という、その筋の人が持っていそうなモノだった。

「に、日本刀・・・」

「お仕事の時の必須アイテムなんです！」

「そうですか・・・。それにしても鉄を斬るとは・・・」

その切れ味、正しく斬鉄剣だった。

「さっさと脱出しちゃいましょう」

「そうですね。あ！ 金さん後ろ！」

「へ？」

金が振り向くと同時に、男が金属バットで思いっきり殴った。

「金さん！」

しかしそこに金の姿は無く、男は動揺した。

「なんだ！？ 手応えがねえ！」

「そんな遅くちゃ当たりませんよ、気配もバレバレです」

「何！？」

今度は男が振り向く前に、金が収めた刀で思いっきり殴ると、男は昏倒した。

「すごい・・・」

「白より遅くて助かりました」

「白さんはもっと速いんですか？」

「ええ。私よりもずっと」

なんだか裏の世界を知った気分になった。

「では脱出です！」

「あ、はい！」

「会長の部屋はどこかな？」



「最上階の一番奥のようですね」

案内図に親切丁寧に書いてあった。

「じゃあそこ目指そうか」

会長の部屋へは随分と簡単に入れた。特に警備もなく、一本道だったためだ。

「お邪魔するよ」

「何だね君たちは。アポは取ってないようだが」

「吉本会長に依頼されてね」

「吉本？ ああ、ライバルの企業だね。何を依頼されたのかね」

「あんたの計画を始末してくれってね」

「計画？ なんのことだか・・・」

会長が惚けてるところに通信が入った。

「こちら金、応答願いまーす」

「こちら白、どうでしたか？」

「桜花ちゃん無事保護しましたー。警備員さんには数人眠ってもらいましたー」

「ご苦労様でした。では責任持って送り届けてください」

「りょうかーい」

先ほどまで涼しい顔をしていた坂本会長の表情が見る見る強張っていった。

「貴様ら！ 何をしてるか分かっているのか！」

「あなたこそ、相手の弱みを握って自分だけ甘い汁を吸おうとして・・・。立派な犯罪ですよ？」

「ふん、証拠もないのに何を偉そうな」

「証拠ならあるんじゃないかな」

「何？」

「桜花ちゃんだけでも十分証拠になると思うけど、あなたさっき吉本会長と電話しなかったかな？」

「確かに電話した。それがどうかしたか？」

「実はね、吉本会長の電話には録音機が仕掛けてあるんだよ」

「なんだと！？ ふざけるな！」

横に立っていたウルフに指示を出すと、ウルフは拳銃を構えた。

「知られたからには生きて返すわけにはいかんな」

もはや罪を認めたと同義だった。

「まるで雑魚の台詞だね」

「なんだとお！？ 撃てえ！」

二人の男は一斉に撃ち始めた。しかし・・・。

「あ、当たらねえ！」

白と葉一は最小限の動きだけで全ての弾丸を避けた。

「ふう、終わりかな？ 撃ってくれてありがとう。これで正当防衛が成立したよ」

「な、なんて奴らだ・・・」

「言い忘れたけど、拳銃程度じゃ私たちは倒せないよ」

「ぐう・・・！ くそお！ どいつもこいつも邪魔ばかりしおって！！」

怒りに震えるが、何をしても無駄だと悟ったらしく、諦めたように椅子に深く座った。

「それで、何が望みだ」

「吸収合併の中止と、ライバルとして以外の吉本との悪意ある接触の禁止。それと桜花ちゃんへの謝罪もね」

「分かった。こちらが損をするわけではないしな。もう吸収合併の計画は諦める」

「ではこちらの書類にサインと拇印を」

坂本会長は朱肉を取り出すと見せかけて拳銃を取り出した。

「馬鹿め！ 甘いわ！」

不意をつかれた葉一だったが、なんとかギリギリ避けられる距離ではあった。しかし、弾が飛んでくる前に猫が坂本会長の手を引っ掻いた。

「フゥー！！」

「痛ええ！！ なんだこの猫は！」

手元にあったペンで刺そうとした瞬間、葉一は拳銃を払いのけると同時に猫を救出した。

「坂本会長。いや、坂本金太夫、あなたは最低の人間だな」

「痛いよお！ 誰か消毒液を持ってきてくれえ！」

泣き喚く坂本を無視して、傷から出た血を使い、拇印を押させた。

「押した、押したから早く医者に！」

「そんな傷は舐めてれば治りますよ」

「くそお！ 覚えてろよ！」

「覚えてるかは分かりませんが、逃げも隠れもしません。始末屋葉月、いつでもお相手しますよ」

全てを終わらせ、吉本会長の部屋へ戻った。

「今回は本当にありがとう」

「いえ、ほとんどついでのようなものでしたし」

「いや、しかし葉月さんはしっかりと依頼をこなしてくれた。立派な当主だ。ウルフのほうはどうなったかの？」

「戦意喪失してましたし、ほっておきました。坂本グループには二度と行かないでしょう。ところで、これから桜花ちゃんはどうなるんですか？」

「もちろんもう無理はさせんよ。小学生相応の生活をしてもらおう。研究者なんかは月に一度来てもらえばいいだろう」

「でもお爺ちゃん、あたしのせいで計画が狂ったって・・・」

「ん？ あんなもの潰れてもなんともないわい。むしろ今はもっと大きな計画を立てている。それに協力してくれないか？」

「もちろん！」

どうやらこっちは上手くいきそうだ。

「それでは私たちはこれで」

「ああ、依頼料のほうはしっかり振り込んでおく。それと、近いうちに喫茶店のほうへ行こうと思うんだが、いいかな？」

「ええ、もちろん。いつでもいらしてください」

「はあ、癒される～」

喫茶店の定休日、金は猫と戯れていた。

「この前はこの猫に助けられちゃったなあ」

「そうなんですか？」

「うん。坂本が悪あがきに拳銃を取り出した時、たまたまウルフが持ってきてたこの猫が坂本を引っ掻いてくれたおかげで発砲はされなかったんだよ」

「偉いねえ～」

「そういえば葉一さま、猫の名前は どうしますか？」

「うーん、考えたんだけど、桜ってどうだろう？」

「桜ちゃん？ いい名前じゃないですか～」

「桜花ちゃんから取ったんですか？」

「まあね。白い桜もあるし、いいかなって」

「桜～」

完全にだらけていると、郵便が来た。

「取ってきます」

金の状態に呆れながら、白が取りに行った。

「誰から？」

「吉本桜花ちゃんからですよ」

「どれどれ」

「こんにちは、お元気ですか？ 桜花です。

先日は大変お世話になりました。

あれからの生活は一変しました。以前よりも両親やお爺ちゃんと話すことが多くなったし、政治家や研究者は本当に月に一度くるぐらいで早百合も私も毎日友達と遊んでいます。こんなことから最初から両親やお爺ちゃんに相談するべきでした。巻き込んでしまって大変申し訳なく思います。

今度の日曜に家族で喫茶葉月にお邪魔することにしました。その時はよろしくお願いします。

」

「上手くやってるみたいだね」

「今度の日曜に来るみたいですね」

「日曜というと明後日ですね」

「それなりのおもてなしをしましょうか」

日曜日、喫茶葉月は忙しかった。

「白、六番にビールとおつまみ！」

とにかく忙しかった。

「金、五番のテーブルと二番のテーブル片付けて」

「はいー！」

そんな中、VIPが来店した。

「いらっしゃいませ、お好きな席にどうぞ！」

「忙しそうですね、葉月さん」

「ええ、今日はなぜか一段と・・・あれ、桜花ちゃん？」

「お手紙に書いておいたでしょう？ 今日来ますって」

「本当に来てくれたんだ！ 会長に社長に副社長さんも」

「ははは、今は吉本で結構だよ」

「分かりました。今メニューをお持ちしますので」

吉本一家がテーブルに着くと、そこだけ空気が違った気がした。

「葉一ちゃん、あの人たち何者だい？」

「何者って、吉本さんご一家ですよ」

「吉本？ どっかで・・・ああ！」

思い出したお客は思わず声に出してしまった。

「お静かに。今日はお忍びらしいですから」

「そうかい、あの吉本グループの会長、社長、副社長、ご令嬢というなんとも豪華なメンバーだな」

「今日は初めての家族水入らずらしいですよ」

「へえ、やけに詳しいな」

「この前縁あって知り合ったんですよ」

「ほう、こりゃ優秀なスポンサーになりそうだな」

「スポンサーはお断りしてますよ」

「なんでだい」

「そんなにお金欲しいなら喫茶店を細々とやってませんよ」

「ははは！ 確かにそいつは言えてるな」

そしてピークが過ぎると、余裕が出来てきたので、吉本一家のテーブルへ着いた。

「いらっしやい」

「お久しぶり、葉月さん」

「そちらが・・・」

「こっちがお父さんの浩二さん、こっちがお母さんの奈美さん。で、お爺ちゃんの幸三さん」

「お忙しいのにお邪魔してしまって、すみません」

「いえいえ、こちらとしては嬉しい限りです」

「それに勝手に依頼に来たということで、ご迷惑をおかけしました」

「いえいえ、依頼は誰であろうと随時受け付けてますし、結果的にはハッピーエンドということになりましたし」

「しかし良いところだなー。あやつにも見せてやりたい」

「あやつというのは？」

「おお、古い友人でな。いつも茶に付き合ってもらっているんだが、今日も連れて来ればよかったかの。ほれ、本業のことを話してたのもあやつだったのな」

「私たちの本業のことを？」

「ああ。森重という奴でな。そこらの若者に負けないぐらい元気な奴で、どこかで何かの管理をしているだか言ってたな」

噂をすればと、その古い友人はやってきた。

「やあ葉一や、また来たよ。ん？ そいつは・・・」

「いらっしやい、森重さん」

「森重だと？」

「おお！ やっぱり幸三じゃないか！」

「なんだ森重、こんなところでなにやってる」

「はっはっは！ わしはこの山の管理人じゃからな。おって当然だろう」

「なんだ、通りで始末屋なんか知ってるわけだ！」

「はっはっは！ そうか、あの時の嬢ちゃんが幸三の孫か！」

「お久しぶりです」

「うむ。元気そうでなによりじゃな。どうだ幸三や、一緒に飲まんか？」

「おお、いいなあ。おーい、ビールを二つ頼めるか！」

「は一い！」

「葉一に言えばよかろうに」

「なに、今回の恩人においそれと頼めんよ」

「遠慮することはありませんよ、仕事ですから」

「はっはっは！ 相変わらずの仕事好きじゃな。幸三と良い勝負じゃないか」

「何を？ わしのほうが意欲旺盛だぞ？」

はっはっは！ と大いに盛り上がっている中、桜花は葉一に話しかけた。

「葉月さん、早百合から伝言です」

「何？」

「『今回は本当にお世話になりました。これからも桜花をよろしくお願いします』だそうです」

「いえいえ、どういたしまして。私のほうこそ、これからもよろしく」

「それともう一つ、以前車内で言ってた『始末するだけが始末屋の仕事じゃない』ってどういう意味だったんですか？」

「ああ、それはね……。桜花ちゃんは、今回の依頼が解決して救われた？」

「もちろん！ 肩の荷が下りたっていうか、すっきりしましたしね！」

「それだよ」

「え？」

「依頼者の心の不安も始末して、依頼者を救う。これが一人前の始末屋。まあ、父さんの受売りだけだね。本来の始末屋には必要ないことだけど、父さんの考えは違ったんだよ」

亡き父親を思い出してか、葉一の目は、どこか遠くを見ているようだった。しかし、その顔に悲しみはなかった。

「でも、おかげで私は救われました。本当にありがとうございました」

桜花は、弾けるような明るい笑顔で、感謝の気持ちを伝えた。

喫茶葉月は、一段と大きく、明るい笑い声に包まれた。

始末屋に求められること。

それは、人の心を救うという信念。

END